



特集
feature

被災者の命と心を支える NHOの災害支援

国立病院機構(以下、NHO)では、災害時に派遣される専門のチームを備えています。救命医療を担うDMAT^{ディーマット}*1と“心のケア”を専門とするDPAT^{ディーパット}*2です。今回は全国各地で大きな被害をもたらした平成30年7月豪雨に際し派遣された、DMATとDPATの活動をご紹介します。

*1 災害派遣医療チーム：Disaster Medical Assistance Team
*2 災害派遣精神医療チーム：Disaster Psychiatric Assistance Team



広島県 賀茂精神医療センターのDPAT



大規模な災害時に活動するDMAT

呉医療センターの活動事例

孤立する呉市内での対応

平成30年7月豪雨は、広島県呉市にも大きな爪痕を残しました。市内では死者25名、被災家屋3,000戸近くにはぼっています(2018年11月13日現在)。未曾有の災害に対し、災害拠点病院*でもある呉医療センターは、いち早くDMATを災害現場に派遣し、懸命の救命活動にあたりました。

DMATを指揮する岩崎泰昌医師(救命救急センター部長)は、「災害時には臨機応変な対応が大切です」と話します。今回の災害では7月6日に広島県から広島市内へDMATの派遣要請があり、チームは広島市内を目指しました。ところが、広島市へと通じる道路は土砂崩れにより通行できず、やむなく呉市内へ引き返して待機となりました。その一方で豪雨は続き、大雨特別警報が発表され、夜には各所で土石流が発生し、呉市は完全に孤立していったのです。

翌朝、普段から当院と連携している呉市消防局から「市内の天応地区で大きな被害が出ており、2名の要救助者がいる。救助には相当の時間がかかりそうなので現場での医療活動を開始してほしい」という連絡があり、広島県DMAT調整本



広島県呉市天応地区の救出現場

部とすぐに調整に入りました。そして前日から病院に待機していた5名の隊員で天応地区へ向かいました。岩崎医師は東日本大震災(2011年)や平成26年8月豪雨による広島市の土砂災害、熊本地震(2016年)でも災害医療の活動があり、その経験を生かした活動となりました。

現場で学んだ課題を次回に生かす

天応地区は、土石流により市内で最も多くの犠牲者を出した現場です。大量の土砂や流木が堆積し、ガレキに挟まれた要救助者を搬送するまでに、



「自分で身を守ることが何より大切です」と話す岩崎医師(中央)のストレス解消法は、ジムでのエアロビクス。先城副看護師長(左)はバドミントンに本格的に挑戦したい、竹田副看護師長(右)はパン作りがストレス解消になると話してくれた

※「24時間緊急対応し、災害発生時に被災地内の傷病者等の受入れ及び搬出を行うことが可能な体制を有する」などの厚生労働省が定める要件を備えた医療機関